

# 霞

- 2010年度秋季展示室だより -

土浦市立博物館

平成22年10月1日発行(通巻第13号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(13) 絵葉書 「茨城県立土浦高等女学校秋季運動会」



明治44(1911)年11月の土浦高女の運動会。日本髪に袴姿の女学生が、木製のアレイを使った体操を披露しています。土浦高等女学校(現土浦二高)は明治36(1903)年に県内2番目の県立高等女学校として前川町(現中央2丁目)に創立、土浦中学校(現土浦一高)が真鍋に移転後、立田町の校舎(現在地)に移りました。秋空にはためく万国旗が、まん幕とともに運動会をにぎやかに飾っています。

【情報ライブラリー検索キーワード「土浦高等女学校」】

### 目次

古写真・絵葉書にみる土浦(13)・・・	1
博物館からのお知らせ・・・	1
【館長講座及び各展示と催し物等】	
古代の農具・鎌と手鎌(古代)・・・	2
小田家15代小田氏治(中世)・・・	3
享保20年「日記」(近世)・・・	4
新治郡役所(近代)・・・	5
船大工道具(近代)・・・	6
市史編さんだより・・・	7
霞短信「土屋家刀剣類の御手入れ」...	8
コラム(13)・・・	8
情報ライブラリー更新状況・・・	8

## 博物館からのお知らせ

### 館長講座(茂木雅博館長)

「飛鳥の遺跡を語る」と題し、古代大和の遺跡をご紹介します。

11月21日・12月19日・1月16日(全て日曜) 時間:午後2時~ ところ:博物館視聴覚ホール

### 国宝・重要文化財の公開

会期9月18日(土)~10月10日(日) 土屋家刀剣の名品をご紹介します。

### 市制施行70周年記念歴史写真展「絵葉書にみる土浦」

会期10月1日(金)~12月26日(日) 土浦の風景を古い写真絵葉書を通して紹介します。

### 第32回企画展「ふたつの霞ヶ浦 カワをわたった人・モノ・情報」

会期10月30日(土)~12月12日(日) 水の道 霞ヶ浦の役割を紹介します。

映画上映会「霞ヶ浦 1977」10月30日(土)・11月13日(土)・12月11日(土)午後2時~

見学会「霞ヶ浦を船からながめよう」11月12日(金)・20日(土)・26日(金)・

12月4日(土) 午後1時30分~2時10分 参加費大人1,500円 要申込

講演会「土浦の河岸をめぐる近世から近代」11月23日(火)午後2時~

「利根川東流 舟運路開発としての近世初期河岸改修」11月28日(日)午後2時~

見学会「土浦城ウォッチング 土浦藩領の村々」11月28日(日)午前9時30分~ 要申込

### 関東地区博物館協会共同企画展「水郷めぐりと筑波山 遊覧都市・土浦とその時代」

会期12月18日(土)~1月30日(日) 土浦の地図や絵葉書、パンフレットなどを中心に紹介します。

2010年度秋季展示は10月1日~12月26日までです。「霞」第14号は1月5日(水)発行予定です。



博物館マスコット  
亀城かめくん

お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

## 古代の農具 鎌と手鎌

## - 根刈りと穂首刈り

石橋北遺跡（市内田村町）の平安時代（9～10世紀）の竪穴住居跡から発見された鉄製鎌と手鎌（穂摘み具）をご紹介します。鎌は刃の長さが約22cm、<sup>とぎ減り</sup>のため先端から3分の2ほどは細身になっています。柄の着装は、鉄製鎌の根元（左下写真の右端）を木柄の<sup>ほぞ</sup>に差し込み、末端を折り曲げ上下を鉄釘などで絞めて固定していたようです。手鎌は長さ約9cm、幅約2cmの長辺に刃部を作り出したものです。厚さ2cm強の木の<sup>て</sup>の一端に目釘で固定し、手のひらに握って稲の穂先を<sup>と</sup>取り取る道具に使われました。

弥生時代初期の稲作には、石の穂摘み具が主として使われていましたが、弥生時代後期になると西日本では鉄の穂摘み具（手鎌）が使われるようになります。弥生時代後半には鉄の鎌も使われるようになりますが、それらは稲の根元を刈り取る鎌ではなく、雑草などを刈り取った草刈り用で、稲の収穫はもっぱら稲の穂先を<sup>ほくびが</sup>取り取る「穂首刈り」だったと考えられています。コンバインなどで機械化される以前の稲の収穫は、鎌を使って稲の根元を刈り取る、いわゆる「<sup>ねが</sup>根刈り」によってなされることが普通でした。稲や麦を刈るには刃が薄くて軽い鎌が、また石が当たったり土を削ったりして、刃の傷みも激しい草刈りにはやや刃の厚い丈夫な鎌が使われています。江戸時代には、稲刈り用の鎌として、刃部に<sup>のこぎりば</sup>鋸刃を使った<sup>のこぎりがま</sup>鋸鎌も発明されています。ちなみに古代において、このような稲刈り鎌が使われだすのは早くとも古墳時代中頃（5世紀前半）からと考えられています。

奈良時代以降は様々な<sup>わら</sup>藁製品が作られていたようであり、木簡にも藁に関する記載があるなど、稲藁が大いに利用されたことがうかがえます。当然、稲の収穫は、鎌による根刈りをしていたと考えられます。ただ、収穫用具としての鉄鎌の登場が、稲の刈り取りを穂首刈りから一気に根刈りへと変化させた訳ではなさそうです。奈良時代に、<sup>しょうぜいちょう</sup>正税帳という諸国の税の出納状況を記録した帳簿があり、その中では納める米は<sup>えいとう</sup>穎稻という稲の穂先を納めることになっています。穎稻の語は12世紀初めころの文書にまで散見され、穂首刈りの伝統が平安時代まで続いていたことがうかがわれます。石橋北遺跡の鎌は比較的薄手の作りで、この鎌が稲の根刈りに用いられたものとするれば、本遺跡における鉄製の鎌と手鎌の出土例は、先の平安時代のあり様を如実に伝える好例と言えるのではないのでしょうか。（塩谷 修）



鎌（石橋北遺跡出土）本館蔵



手鎌（穂摘み具、石橋北遺跡出土）本館蔵

12/4（土）午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

<sup>ねじかきた</sup>根鹿北遺跡出土の瓦塔・瓦堂

弁才天遺跡出土の和同開珎（古代・中世コーナーに展示）



# 小田家 15代 小田氏治

## - 戦国武将小田家最後の当主

筑波山南麓と桜川との間に居を構え、約300年間小田氏の居城としてあり続けた小田城は、15代氏治が最後の城主となってしまいます。氏治の動静については、「霞」第4号「関東幕注文」、同6号「小田みかたのちり」、同7号「多賀谷祥聯書状」で紹介してきました。永禄12(1569)年1月、佐竹・真壁・多賀谷氏等による小田城攻略によって、落城はしなかったものの小田領の郷村は焼き尽され、領国の疲弊は決定的な状態にまで陥っていたと思われます。このような中で頼みの綱としていた後北条氏が同年5月に上杉氏と越相同盟を結んだため、氏治は佐竹氏の南進に対峙して孤立してしまいます。

情勢は小田(氏治)氏と佐竹(義重)氏の一騎打ち的な様相となり、同年10月筑波山南東側において両軍の大規模な戦闘が行われました。これを「手這坂の合戦」と呼んでおり、この時の軍事行動については「佐竹家旧記」に記されています。これによると佐竹軍の片野城主太田資正(注1)、柿岡城主梶原政景(注2)、真壁城主真壁久幹(注3)が小田軍を迎え撃ち、真壁衆の別働隊が小田城を急襲してこれを占拠。退路を断たれた小田軍は「土浦左衛門館(土浦城)」へ敗走したとされています。同13年5月、義重は小田城を資正に与えて支配の安定化を図っており、その後の氏治による小田城奪還はなく、15代続いた小田家の桜川下流域の領主的支配は終焉を迎えてしまいます。

この氏治の肖像画は、小袖に黒の絹をまとい、上げ畳の上に褥を敷いて安座しています。前には8巻からなる法華経の巻子が黒漆の箱に並び、内1巻を右手に持って、左手には数珠を握っています。仏門に入った氏治の左膝前には、虎模様の猫が背中を丸めて寝ています。上部には雲巖寺(注4)中興の祖といわれる大虫宗岑禅師(注5)の讚があり、天正16(1588)年氏治58歳の寿像画(注6)であることがわかります。氏治は後に結城秀康(注7)に仕えて越前(福井藩)に赴き、慶長6(1601)年71歳で没しました。



「小田氏治肖像画」(部分)法雲寺蔵 県指定文化財

(注1) 扇谷上杉氏の重臣。永禄8年頃から佐竹義重に客将として迎えられ片野城主となる。三楽斎道誉と号す。

(注2) 太田資正の次男。佐竹義重の客将として柿岡城主となる。

(注3) 佐竹氏に従属し、手這坂の合戦後に義重から柿岡を宛行われる。天正元年、氏治は久幹等に佐竹との和談について内密の連絡をとっている。

(注4) 栃木県大田原市にある臨済宗妙心寺派の寺院。天正18年豊臣秀吉の小田原攻めで戦火に見舞われる。

(注5) 臨済宗妙心寺派の僧。小田(つくば市)の巢月院など、北関東五山派の多くを妙心寺派に帰属させている。

(注6) 存命中に造っておく人の像。

(注7) 徳川家康の次男。天正18(1590)年下総国結城(結城市)の大名結城晴朝の姪と婚姻、家督を継ぐ。

(中澤達也)

11/27(土)午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

小田みかたのちり(複製)、関東幕注文(複製)

多賀谷祥聯書状(複製)(古代・中世コーナーに展示)



きょうほう

# 享保20年「日記」

わしじんじゃ おおいち

## - 鷲神社の大手のにぎわい -



歴史を重ねてきた土浦では、旧家で使われていた江戸時代や明治時代の茶碗や湯飲み、膳やすり鉢などがのこっていることがあります。これらの多くは土浦で作られたものではなく、漆器では輪島や日光、磁器では瀬戸や有田、陶器では信楽や備前など、生産地は日本全国に広がっています。一体これらの品はどのようにして土浦へ入ってきたのでしょうか。

江戸時代の流通の一端を教えてくれる古文書があります。表紙の文字は消えかかっていますが「日記」と読めます。この日記は個人の記録ではなく、町役人が書き留めた公務日記です。享保20(1735)年、東崎町の町年寄内田久右衛門は町が納めた年貢や土浦藩から仰せつかった業務など、公用の記録を一年間記録していました。

このなかに10月に東崎町の鷲神社で行われた大手の記録があります。大手の開催を当て込んで外からやってきた商人たちは133人に及びました。町年寄は境内で売られた品物の品種ごとに売上金を合計して町奉行所に報告しました。この記録によると10月19

### 「日記」表紙

日から25日までの期間中、もっとも売上げが多かったのは呉服の店で211両あまり、次が腕の店で134両、荒物(ザルや蓆など)の店では75両、ほかにも麻・日光物(漆器)・小間物などが売られ、合計すると729両にもなりました。

大手では道ばたに店を張って商売する辻売りが149人も出て、薬やまんじゅう、飴や火打ち石などが売られました。この時期、水戸街道に沿って店を構えていた一般の商店の売上げも増加しています。大手にやってきたのは商売人だけではありませんでした。江戸堺町の太夫が「牛坊主見世物」を演じ、軽業師、のぞきからくりの興行も行われました。大手は物の売買だけでなく、娯楽の場でもあったようです。

大手の商品も多くは江戸からもたらされましたが、輸送に活躍したのは船でした。自動車や鉄道がなかった時代、大量の荷物を運ぶには人馬よりも船を用いるのが安価で有利でした。今回ご紹介した「日記」とは別に、土浦河岸の蔵敷(倉庫料)を取り決めた古文書があります。藍玉や琉球表(豊表)、黒砂糖、筵や茶など、さまざまな物資は利根川・霞ヶ浦を経由し、高瀬船によって土浦河岸へと運ばれてきたのです。

第32回企画展「ふたつの霞ヶ浦 カワをわたった人・モノ・情報」(会期10月30日(土)~12月12日(日))では霞ヶ浦流域の水運の歴史をご紹介します。(木塚久仁子)



「日記(部分)」  
(内田家文書)  
当館所蔵

10/23(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
高瀬船の帆(近世コーナー「商業の発展」に展示)  
覚(問屋・荷物蔵敷銭)  
(近世コーナー「商業の発展」に展示)



にいはいぐんやくしよ  
**新治郡役所**

**- 土浦城址にあった新治郡のシンボル -**

茨城県の県庁所在地といえば水戸ですが、かつて土浦が県庁所在地だった時代があったことをご存じでしょうか。明治4(1871)年の廃藩置県により、土浦藩は7月に「土浦県」となり、さらに11月には「新治県」の管轄に入りました。いずれも県庁は土浦城址の旧本丸内におかれ、管内の事務が執り行われたのです。

しかし、残念ながら長くは続かずその後明治8年、新治県は「茨城県」に統合、ほぼ現在の茨城県の県域が確定されました。土浦と下妻には新しく県の支庁が設置されることとなり、土浦では旧新治県庁が土浦支庁となり、県政の円滑化が図られたのです。

明治11年7月、郡区町村編成法により、大小区制にかわって郡制が敷かれました。郡が町村をまとめ、県が郡を総括することとなったため、同年12月には土浦支庁が廃され、新たに新治郡を統括する「新治郡役所」が開設されました。

県庁、支庁、郡役所として使用されたのは土浦城址にあった<sup>ほんまるやかん</sup>日本丸館でしたが、明治17年3月、火災により焼失してしまいます。火災の影響を受けて<sup>ひがしやくら</sup>東櫓もとり壊されたと伝わっています(平成10年復元)。その後、二階建ての建物が建造され、しばらく郡役所として使用されていました。明治30年4月創立の茨城県尋常中学校土浦分校(のちに土浦中学校、現在の土浦一高)はこの建物の2階を使用して授業を開始しています。

裁判所や警察署などの日常生活に直接かかわりのある諸官庁も設置された結果、土浦が県南地方の行政の中心的役割を担うことになりましたが、機能を1ヵ所に集中させることは郡内の人々にとって必ずしも歓迎すべきことではなかった一面もあります。明治41年11月頃から新治郡役所の移転誘致運動がはじまり、12月の通常県会において、新治郡役所新築費の審議に先立ち、土浦町から石岡町への郡役所移転の決議がありました。賛成派と反対派の争いは新治郡会の中にも持ち込まれ、暴力事件さえ発生したといえます。しかしこの問題に対して内務省およびそれを代弁した茨城県知事の意見は、移転は絶対不可能というものでした。

<sup>うよきまげつ</sup>紆余曲折を経て、大正2(1913)年、老朽化した郡役所は西洋風総二階建ての建物に建て替えられました。その記念に発行されたのが写真の絵葉書です。筑波山と桜・流水を配した、華やかなデザインとなっています。堂々とした建物は、大正12年3月に郡制が廃止となってからも、「新治郡自治会館」として、さらに昭和7(1932)年には現在の常陽銀行の場所に移築されて「土浦町公会堂」・「新治地方事務所」等に使用されました。昭和16年の大洪水の時には市民の避難場所にもなっています。建物は昭和44年に解体されましたが、当時の多くの人々の記憶に残る存在であったと思います。  
(野田礼子)



「新治郡役所新築記念絵葉書」 当館所蔵

10/2(土)午後2時から  
このページで紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
常陸国新治県庁郭土浦町総図(写真)  
日本丸に建てられた新治郡役所(写真)  
(いずれも近代コーナーのメッセージパネル)



# 船大工道具

## - ノコギリと釘打ち -

市内川口町には数人の船大工の方がいました。高瀬船の需要がなくなった大正から昭和時代にかけては、漁船のほかにボートや海軍の練習船などの製作や、貸しボート業を営んだ人もいました。以下には、船大工に特有な大工道具の中から、ノコギリと釘打ちの道具を紹介します。

### 【ノコギリ】

木材の切断にはノコギリをしますが、船大工道具の中にも様々な種類のノコギリがあります。木の繊維に対して横方向に切断するための「ヨコビキ」、同じく縦方向に切断するための「タテビキ」、銅板を切断するための「銅板ノコ」、そして板材の間隔を一定にするための「スリノコ」などがあります。

この中でも「スリノコ」は船大工特有の道具で、スリノコを用いた「すり合わせ」は造船にとって重要な技術の一つです。「すり合わせ」は、2枚の板を仮止めして隙間にスリノコを入れ、こするように引くことで板の曲がりや凹凸を整える作業です。引く感覚を加減することで、板材の間隔を一定にし、接合したときの板の密着性を高める効果があります。「すり合わせ」では、初めに歯と歯の間隔が広いノコギリですったあと、細かい歯のもので仕上げをします。歯は縦引きのノコギリと同様の形態です。

### 【釘打ちの道具】

釘打ちの道具には、ゲンノウ（カナヅチ）のほか、船釘を打つ時の緩衝材としてのクギシメ、ツバノミがあります。

このうちツバノミは、板材に釘穴をあけるためのもので、船大工に特有の道具です。釘を打つ前に板にツバノミをカナヅチで打ち込み、釘の通り道を作ります。形状は、金属部分の先端部がノミ状を呈し、根元部分にツバがあります。カナヅチを直接受ける持ち手には、木製の平坦面があります。ツバの数でカタツバ（1つ）とリョウツバ（2つ）の2種があります。船を作るうえで重要なのは、漏水しないように板材を隙間なく継ぎ合わせることです。各々の板材に釘道をつける作業は、板材を接合する上で欠かすことのできない工程でした。

これらのことから、船の漏水を防ぐために木材を密着して接合させる技術方法とそのための道具を、船大工が重要視していたことが分かります。  
(比毛君男)



写真左：ツバノミ（リョウツバ）

写真上：スリノコ

11/6（土）午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

カンナ  
船釘  
道具箱（いずれも近代のコーナーに展示）



# 市史編さんだより

## ～ ～ ～ 新聞記事に見る土浦の花火 昭和の記事から ～ ～ ～

毎年10月の第1土曜日に開催される土浦全国花火競技大会は、大正14(1925)年、神龍寺の住職であった秋元梅峯師が、霞ヶ浦海軍航空隊殉職者の慰霊と、不況にあえぐ商店街の復興のために霞ヶ浦湖畔で開催したのが始まりです。博物館では、市史編さん事業の一環として、明治・大正・昭和時代の新聞から土浦に関する記事を抽出し、要約する作業を行ってきました。大正・昭和時代のいはらき新聞を読んでいくと、その時々の花火大会の賑わい、そして花火大会が土浦に好況をもたらし、地元の商店街の協力を得て年々盛大になっていく様子を見ることができます。

昭和6年10月12日3面の記事に、煙火大会会場付近に設けられた拳闘、サーカス、犬芝居その他の掛小屋は大入り満員の盛況であったと書かれています。花火以外にも内容が盛りだくさんで、お祭りのような賑わいだったのでしょ。 「鉄道、電鉄、自動車、飲食店は何れも大儲け」(昭和6年10月13日夕刊2面)

「常南電車、霞ヶ浦汽船、各乗合自動車も全能力を発揮して観衆を運び、初日10万、2日目5万余の客が土浦町に落としした金は少くも5万円以上と見られ、不景気の折にも拘らず大成功であった」(昭和6年10月14日夕刊2面)土浦に好況をもたらしている様子が生き生きと伝わってきます。

右は、昭和11年10月17日から2日間開催された全国煙火競技大会について書かれた記事です。「土浦全町は各地から押かける観衆で文字通りに埋まる」「晩秋の土浦はまつたく煙火景気で横溢している」今と変わらぬ賑わいですね。また、当時は霞ヶ浦海軍航空隊殉難者及び全国煙火製造業者殉難者の追悼会が行われた後に、打ち上げを開始している様子がわかります。この年は煙火大会が十周年を迎え、霞ヶ浦海軍航空隊が慰霊飛行や各種高等飛行を披露し、さらに大きな大会になっています。サーカス団その他幾多の興行物も準備されていたようです。同19日3面には、「大会は農村景気で非常な人出で、迷子続出だった」と記されています。

そんな花火大会も第二次世界大戦のため中止となりますが、昭和21年には進駐軍の許可を得、復活しています。戦後の物資の乏しい中、わずか2

面のみ茨城新聞の見出しが伝えています。「桜川畔の煙火/進駐軍の許可あれば復活」(昭和21年7月17日2面)、「土浦で納涼花火大会/進

上：昭和11年10月17日  
いはらき2面

駐軍から許可さる」(昭和21年8月3日2面)そして9月29日、進駐軍将兵を招待し、5分に一発の親善の花火を打ち上げる競演大会が桜川畔で9年振りに開催されました。10月1日2面の記事に、「市内の商店では観衆の旺盛な購買力に商品がバタバタ売れてしまい、一日で土浦に落ちた金額は500万円を下らぬという花火景気、土浦駅の乗降客は78,936名という驚異的数字を示し、常磐線の列車は屋根の上だけでも500名以上乗ったほどの超満員、市内を埋めつくした群衆は35万人」と記されています。長い戦争が終わり、待ちに待った花火大会に胸躍らせた人々の姿が見えるようです。

今では日本三大花火競技大会のひとつとして全国に知られ、当日数十万もの人で賑わい、全国の花火師たちが技術を競う舞台となった土浦全国花火競技大会。ずっと平和が続き、毎年たくさんの人々が夜空に咲く芸術を楽しめるよう、願わずにはおれません。花火大会の歴史に思いを馳せて御覧になるのもひとつの見方ではないでしょうか。

海老原麻里子(市史編さん係非常勤職員)

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、博物館を代表する資料「土屋家の刀剣」の管理にご協力をいただいている刀剣鞘師の山田敬三先生にご寄稿いただきました。

## 『土屋家刀剣類の御手入れ』

平成 14 年度に土浦市が土浦藩土屋家旧蔵の刀剣を購入されて以来、市の文化財保護審議会委員本間隆雄様のご紹介により、刀剣の御手入れに携わらせて頂いております。日本刀は鍛え上げられた玉鋼で造られていますが、保存の仕方や扱いが不適切ですと、意外と錆び易く、またヒケと呼ばれる傷もつき易いものなのです。しかし定期的な御手入れは必ずしなければならない事ですので、その作業に際しましては勿論気は遣いますし、緊張もしておりますから帰宅すると全く何もする気がしない程の疲労感を覚えます。

一般の方で刀剣に対し、怖いという感情を持たれる人もいますが、日本刀の美の源泉は戈を止める真の武の器としての威力を備えた処にあるわけです。更に単なる武門の利器としてだけではなく、大変にレベルの高い精神性も込められています。そして当博物館の刀剣類は武家の表道具として尊重された各時代の作品が揃っているだけではなく、その外装である拵が備わっているものが多く有るという事もその特徴です。拵の製作年代は殆どのものが江戸時代と思われませんが、元禄以前と鑑せられるものも有り、往時の大名の風俗と美意識が具現化された美術品であり、貴重な歴史資料でもあります。

また、当博物館の立地は土浦藩土屋家の居城、土浦城の跡で櫓や門などの建造物や、松の古木も残っているという正に刀剣を鑑賞するにおいては最高のシチュエーションであると申せましょう。たとえ刀剣の専門的な事は分からなかったとしても、歴史を雄弁に語りかけてくれるこれ等の刀剣や外装を、多くの方に御覧頂きたいと願っております。

(刀剣鞘師 山田敬三)



## コラム(13) 家あってこそその資料(軍刀の場合)

近年、刀剣類の寄贈や寄託の相談を受けることがあります。中でも、中身は日本刀で外装が軍刀であるものの相談が比較的多く、その一例を紹介します。刀を博物館に預けたい理由をご所蔵者に伺ってみると、刀が自宅にあると危ない、気持ちが悪いといったことが殆どです。よく話を聞いてみると、父親が戦時中に持っていたもので生前は大事にしていたが、物故してからは家族がその処分に困っているとのことでした。古来、日本人は精神性と美術性を融合した日本刀を大事にしてきたものですが、現代人はいとも容易く処分しようとするようになってしまったのでしょうか。軍刀においても多くは指揮刀であったり、自決の際のものであって、不幸な使われ方をしたのはごく一部に過ぎません。戦後、多くの軍人が海外から帰国する際に、背に腹はかえられず刀と交換に食料を得たとも聞きます。ご所蔵者には、大変な苦勞をして刀と共に帰国した故人のことを考えて欲しい、むしろこの刀こそ戦争の生き証人ではないかと話します。年に一度でもいい、お盆の時にも遺品の刀を出して、子や孫にご先祖のこと、戦争のことを伝えていくのも方法のひとつではないかと…。歴史資料には、刀に限らず家々においてこそ生かされる品もあります。保存方法を含め、ご所蔵者と資料の双方にとって良い方向性を模索するのも、目にも見えない学芸員の仕事のひとつかと思っています。

(中澤達也)

## 情報ライブラリー更新状況

【2010・10・1 現在の登録数】

古写真 457点(+10)

絵葉書 364点(+10)

( )内は2010年7月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した絵葉書もご覧いただけます。

## 霞(かすみ) 2010年度

秋季展示室だより(通巻第13号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、

博物館2階庭園展示です。

2010年度秋季展示は、2010年10月1日～12月26日となります。「霞」2010年度冬季展示室だより(通巻第14号)は1月5日(水)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。